

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04031

研究課題名(和文)越境的ネットワークの発展と拡散に関する社会心理学的研究

研究課題名(英文) Social psychological research on the development and the spread of Okinawans' transnational networks

研究代表者

加藤 潤三 (KATO, Junzo)

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：30388649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、沖縄県系人における越境的ネットワークについて、その実態を明らかにするとともに、「世界のウチナーンチュ大会」が越境的ネットワークの発展と拡散に及ぼす影響について検討することを目的とした。

研究1～3による調査の結果、県系人のネットワークは、ネットワークの有無が両極化しやすいこと、その中、世界のウチナーンチュ大会が県系人にとって、それぞれの国・地域と沖縄をつなぐ「母県とのネットワーク」、国同士をつなぐ「越境的なネットワーク」、そして国内や地域内をつなぐ「ローカルなネットワーク」の構築に寄与することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clarify the actual states of transnational networks among Okinawan descendants and to examine the impact of the Worldwide Uchinanchu Festival on the development and the spread of transnational networks.

Results of Studies 1-3 found that the existence of Okinawan descendants' networks tend to be on one extreme or the other. The studies also found that for Okinawan descendants, the Worldwide Uchinanchu Festival contributed to the formation of a network with the parent prefecture, which connects each Okinawan descendant's country and region to Okinawa, a transnational network that connects countries, and to a local network that connects people within the same country or region.

研究分野：社会心理学

キーワード：海外移民 沖縄 県系人 越境的ネットワーク 受容 世界のウチナーンチュ大会

1. 研究開始当初の背景

人は、より多くの資源やより豊かな生活を求めて、移動と定住を繰り返してきた。日本でも、1885年の官約移民（政府の斡旋した移民）以降、本格的な海外渡航が始まり、戦前戦後を合わせ約100万人の日本人が海外に移住し、現在では約380万人（推定）の海外日系人がいるとされている（海外日系人協会,2017）。

その中でも特に沖縄は、移民県として多くの海外移民を輩出してきた。具体的に示すと、戦前の移民者数は全国2位の約7万人であり、当時の沖縄県民の実に10人に1人が移民であった（石川,2005）。そして現在は、41.5万人の沖縄県系人がいるとされており（第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会,2017）、北米・中南米を中心に、世代を重ねながら、世界中にウチナーンチュ（沖縄人）が広がっていつている。

このように沖縄県系人が世界に広がる中、沖縄県は「県系人・県人会等とのネットワークの構築を図り、我が国の南における国際交流拠点の形成を図る」ことを目的に、「世界のウチナーンチュ大会」を5年に1度開催している。金城（2008）や野入（2012）は、この大会が、国境を越えた絆（『越境的ネットワーク』）を強化しつつ、ウチナーンチュとしてのアイデンティティを醸成するインキュベーターの役割を果たすことを示唆している。

しかし現状、海外にいる沖縄県系人がどのような越境的ネットワークを構築しているのか、その実態が十分に把握されておらず、また上述した「世界のウチナーンチュ大会」による越境的ネットワークの強化に関しても、参加者の増加傾向やネットワークを深化させるようなプロジェクトの創出などから導き出された見解であり、この大会を通じてウチナーンチュ同士がどれほどネットワークを構築しているのかについては、実証的に明らかにされていない。

2. 研究の目的

以上の問題点を踏まえ、本研究では次のような目的のもと研究を行った。

(1) 沖縄県系人が国内外でどのようなネットワークを保持・形成しているのかについて、その実態を明らかにする。【研究1】

(2) 第6回世界のウチナーンチュ大会の参加者（沖縄県系人・沖縄県民）に対する調査を実施し、越境的ネットワークの発展における大会の効果について検討を行う。また沖縄県系人の心理を明らかにするために、過去の先行研究の中心的な概念であり、大会の主要目的にもなっている沖縄アイデンティティについても検討を行う。【研究2】

(3) 第6回世界のウチナーンチュ大会を経て、ネットワークがどのように変化したのかについて明らかにする。【研究3】

これらの研究目的を明らかにするために、平成27～29年度にかけ、調査を実施した。

3. 研究の方法

(1) 【研究1】 海外県人会対象の質問紙調査
調査対象団体：沖縄県（広報交流課）の海外県人会名簿に記載されていた88団体

調査方法：第6回世界のウチナーンチュ大会実行委員会事務局に協力を依頼し、海外県人会の連絡先（メールアドレス）を入手した。そのメールアドレス宛てに調査依頼・調査票・県人会リスト（それぞれ日本語版と英語版）を添付し、県人会としての回答を依頼した。回答は県人会の調査期間は2015年11月中旬から実施した。

主な調査項目：ネットワークの測定－県人会リストおよび、沖縄県内の各機関・団体名を提示し、その中から交流のあるものを回答してもらった。また交流のあるものについては、交流頻度・交流の分野についても回答してもらった。

(2) 【研究2】 第6回世界のウチナーンチュ大会の参加者対象の質問紙調査
調査協力者：第6回世界のウチナーンチュ大会の参加者1,093名（有効回答数）。

調査方法：質問紙による調査を実施した。調査は大会2日目から最終日（2016年10月28～30日）の3日間実施した。調査票はA3両面であり、4言語（日・英・西・葡）で作成した。またオンラインでも回答できるよう、Web上でも紙ベースと同様のアンケートフォームを作成し、調査の一部はタブレットで実施した。調査票の配布・回収は、大会会場に設置したブースおよびその周辺（沖縄県奥武山公園内）にて調査スタッフが大会参加者に声掛けをし、協力の意思を示した参加者に調査を依頼した。

主な調査項目：

- ・デモグラフィック：参加区分、沖縄系、移民世代、居住地、県人会の所属など
- ・大会に関する評価：参加目的、満足度など
- ・ウチナーンチュに関する意識等：アイデンティティ（沖縄・移住地）、ウチナーネットワーク（大会を通じて新たに交流が生まれたネットワーク）など

(3) 【研究3】 海外在住の沖縄県系人対象の質問紙調査

調査協力者：ペルー・ボリビアに在住する沖縄県系人16名（最終年度内までに十分な調査協力が得られていない。そのため研究期間終了後も継続的に調査を実施している）

調査方法：Web上にアンケートを作成し、回答してもらった。調査依頼は、研究協力者のネットワークを利用し、SNSを通じて依頼を行った。2017年12月から実施した。

主な調査項目：ネットワークの測定－国内・沖縄・海外における沖縄県系人とのネットワークについて、人数を尋ねた。また研究2と関連して、第6回世界のウチナーンチュ大会に参加した個人には、大会を通じて新たに生まれたネットワークを尋ねた。その他、県人会との関わりや沖縄アイデンティティなどについても質問を行った。

4. 研究成果

(1) 【研究1】

回答の得られた海外県人会が有する他の県人会とのネットワークの数の平均は 4.33 ($SD=5.88$) であった。ただし度数で見ると、0ないし1が全体の48.1%を占めていた。その一方で、ネットワーク数が19、20と非常に多い団体もあった(表1)。このことから、全般的に海外県人会相互のネットワークは決して多いわけではないこと、またネットワークを有する県人会とそうでない県人会が両極的であることが示された。

表1.他の県人会とのネットワーク数

ネットワーク数	度数	%
0	6	21.4%
1	7	25.0%
2	2	7.1%
3	2	7.1%
4	3	10.7%
5	3	10.7%
6	1	3.6%
13	1	3.6%
17	1	3.6%
19	1	3.6%
20	1	3.6%
	28	100.0%

次に、ネットワークが越境的に国や地域(エリア)をまたぐか否かを検討したところ、海外県人会間のネットワークは国内が中心であり(63.9%)、国をまたぐネットワークは少ない(36.1%)ことが示された。また国をまたぐネットワークについても、同一エリア内(北米内、南米内など)が大半であった(83.2%)。このような背景として言語の問題があるだろう。国内や同一エリア内では言語が共通することが多いため、コミュニケーションが促進され、交流も頻繁になると考えられる。また同じ国やエリアでは、社会状況が類似していることも関連していると考えられる。国内・エリア内の県人会は、同じ問題を共有し、情報交換を行う存在としてネットワークが構築されやすいのではないだろうか。

(2) 【研究2】

大会を通じて、新たなウチナーンチュ同士のネットワークが生まれたか、その人数を尋ねた。回答の集計に当たっては、全体の度数の分布の割合から、全くネットワークが生まれなかった「0人」、「1~10人」、「11~30人」、「31~50人」、「50人以上」の5段階に分類しなおした。海外参加者と県内参加者で尋ねている項目(ネットワークの種類)が異なるため直接的に比較することが難しいが、全体的な傾向として海外参加者においては、「0人」という人も30%前後いたが、逆の言い方をすれば、70%近くの人々は大会を通じて新たなネットワークを築いていた。また新たに生まれたネットワークは、それぞれの国・地域と沖縄をつなぐ「母県とのネットワーク」、国同士をつなぐ「越境的なネットワーク」、そして国内や地域内をつなぐ「ローカルなネットワーク」と多岐にわたっていた。

一方、県内参加者では、いずれのネットワークでも「0人」の割合が最も多く、また人数を回答したとしても「1~10人」と少人数がほとんどであった。県内の人にとってこの大会はウチナーンチュ同士のネットワークを作る機会としては十分に機能しておらず、改善の余地が大きいと考えられる。

表2. 第6回世界のウチナーンチュ大会によるウチナーネットワークの構築

参加区分	新たに生まれたウチナーネットワーク		0人	1~10人	11~30人	31~50人	50人以上
海外参加者	居住国の入	度数	57	76	30	13	15
		%	29.8	39.8	15.7	6.8	7.9
	沖縄県内の人	度数	62	90	36	5	12
		%	30.2	43.9	17.6	2.4	5.9
	日本国内の人	度数	104	66	10	1	6
		%	55.6	35.3	5.3	0.5	3.2
他国の入	度数	72	83	27	7	8	
	%	36.5	42.1	13.7	3.6	4.1	
県内参加者	沖縄県内の人	度数	290	69	14	2	10
		%	75.3	17.9	3.6	0.5	2.6
	日本国内の人	度数	314	51	8	1	3
		%	83.3	13.5	2.1	0.3	0.8
	海外の人	度数	314	68	9	3	3
		%	79.1	17.1	2.3	0.8	0.8

次に沖縄県系人のアイデンティティについて、移民世代間による比較を行った。なおアイデンティティとして、沖縄と移住地の双方を取り上げた。

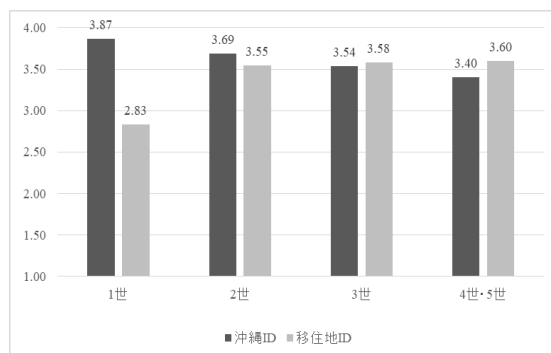


図1. 沖縄県系人の移民世代別アイデンティティ

年齢の影響を考慮し、2 要因（移民世代×ID）の混合計画による共分散分析を行った結果、移民世代および ID の主効果はいずれも有意ではなく、移民世代×ID の交互作用が有意であった ($F(3, 176)=11.48, p<.001, \eta^2=.16$)。Holm 法による多重比較の結果、1 世では沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティに有意差 ($p<.001$) があり、沖縄アイデンティティの方が高かった。一方、2 世以降では沖縄アイデンティティと移住地アイデンティティの間に有意差はなかった。またアイデンティティごとで見ると、沖縄アイデンティティについては世代間で有意差は認められなかったが、移住地アイデンティティについては 1 世が 2 世以降よりも有意に低かった ($p<.01$)。

この結果より、沖縄で生まれ、自身が海外に移動した 1 世においては、自らが選択した移住地よりも生まれ故郷である沖縄に対して、より強いアイデンティティを示すことが明らかになった。2 世以降についてみると、沖縄、移住地とも 3.5 点前後であった。移住地（ないし海外）に生まれ、移住地で育った 2 世以降の県系人においても、高い沖縄アイデンティティが保持されていること、つまり沖縄アイデンティティの継承がなされていることが示された。また両アイデンティティの得点がともに高かったことから考えると、2 世以降の世代では、自分のルーツにあたる沖縄と、自分の生まれ育った移住地双方に対するアイデンティティが共存していると考えられる

(3) 【研究 3】

海外在住の沖縄県系人対象の質問紙調査については現状、十分な調査協力が得られていない。そのため継続的に調査を実施しているが、ここでは最終年度終了時点までの調査結果について報告する。

調査の結果、「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」に参加した個人からもデータを収集できた。分析の結果、大会を通じた新たなネットワークとして、母県である沖縄 ($M=22.00, SD=15.58$)、海外 ($M=31.25, SD=27.20$)、国内 ($M=12.25, SD=6.85$) それぞれにおけるウチナーネットワークの拡散が確認された。なお大会の参加者と非参加者の間で、日常的に保持するウチナーネットワーク（国内・沖縄・海外）の数に相違があるか検証したところ、両者で差は認められなかった。

むしろウチナーネットワークと関連していたのは、沖縄に関する情報接触 ($r=.73 \sim .84$) であり、特に沖縄・海外とのネットワークとの間に高い相関が認められた。なお情報源としては、従来より指摘されてきた県人会からの情報だけでなく、インターネットや SNS などオンラインを通じた情報接触が、現状のウチナーネットワークの鍵になることも明らかとなった。

(引用文献)

- ① 第 6 回世界のウチナーンチュ大会実行委員会 (2017) . 『第 6 回世界のウチナーンチュ大会報告書』.
- ② 石川友紀 2005 沖縄県における出移民の歴史及び出移民要因論, 移民研究, 1, 11-30.
- ③ 海外日系人協会 2017 日系人について知ろう <http://www.jadesas.or.jp/about/nikkei/index.html>
- ④ 金城宏幸 2008 「世界のウチナーンチュ大会」と沖縄県系人ネットワーク (1) : 沖縄社会へのインパクト, 移民研究, 4, 83-96.
- ⑤ 野入直美 2012 構築される沖縄アイデンティティ: 第 5 回世界のウチナーンチュ大会参加者アンケートを中心に, 移民研究, 8, 1-22.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

- ① 加藤潤三・前村奈央佳・金城宏幸・野入直美・酒井アルベルト・山里絹子・グスターボメイレス・石原綾華 2018 沖縄県系人における沖縄アイデンティティとウチナーネットワークの検討: 「第 6 回世界のウチナーンチュ大会」の基礎的分析と合わせて, 移民研究, 14, pp.1-20, 査読有.

- ② 前村奈央佳・加藤潤三 2018 沖縄県系人の価値観に関する研究: 北米・中南米・沖縄による地域間・世代間比較, 移民研究, 14, pp.21-34, 査読有.

- ③ 野入直美 2018 主観と愛着の沖縄アイデンティティ: 「世界のウチナーンチュ大会」調査に見る海外沖縄県系人の意識, 移民研究, 14, pp.35-58, 査読有.

- ④ Gustavo MEIRELES 2018 The Changing Character of Ethnic Organizations of the Okinawan-Brazilian Community: Analysis of the Data from the 6th Worldwide Uchinanchu Festival, 移民研究, 14, pp.59-72, 査読有.

[学会発表] (計 8 件)

- ① 加藤潤三・前村奈央佳 2018 『第 6 回世界のウチナーンチュ大会』にみる県系人のアイデンティティとネットワーク, 沖縄心理学学会.

- ② 前村奈央佳・加藤潤三 2017 沖縄県系人の価値観に関する研究, 日本社会心理学会.

- ③ KATO Junzo & MAEMURA Naoka 2017

Transmission and maintenance of cultural practice among Okinawan emigrants, Asian Association of Social Psychology.

④ MAEMURA Naoka & KATO Junzo 2017 Roots tourism of Okinawan migrants: how the over third generation see their ancestral homeland, Asian Association of Social Psychology.

⑤ 加藤潤三・前村奈央佳 2017 沖縄の文化・伝統の実践における地域間・世代間比較, 日本コミュニティ心理学会.

⑥ 加藤潤三・前村奈央佳 2016 沖縄系海外県人会の越境的ネットワークに関する研究-『第6回世界のウチナーンチュ大会』前の時点において, 日本社会心理学会.

⑦ KATO Junzo & MAEMURA Naoka 2016 A Network Study of Okinawan Migrants' Associations (Kenjinkai) Around the World, International Association for Cross-Cultural Psychology.

⑧ 加藤潤三・前村奈央佳 2016 沖縄県民は海外移民をどれほど受け入れているのか, 沖縄心理学会.

6. 研究組織

(1)研究代表者

加藤 潤三 (KATO, Junzo)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号: 30388649

(2)研究分担者

野入 直美 (NOIRI, Naomi)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号: 90264465

前村 奈央佳 (MAEMURA, Naoka)
神戸市外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 50632238

金城 宏幸 (KINJYO, Hiroyuki)
琉球大学・法文学部・名誉教授
研究者番号: 50274874

酒井 アルベルト 清 (SAKAI, Albert Kiyoshi)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号: 50458692

山里 絹子 (YAMAZATO Kinuko)
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号: 00635576

(3)連携研究者

(4)研究協力者

グスターボ メイレレス (Gustavo MEIRELES)

石原綾華 (ISHIHARA, Ayaka)